

仙台司教区 教区事務所だより



(第 26 号)
昭和54年12月1日

待降の「時」を生きる

「三百余年来、日本のキリスト信者は、イエズス・キリストの降誕日を祝ってきた。然しクリスマスは祝う日本人は、全部がキリスト信者ではない。こんな事は、キリスト教だけを知っている人々には異様に響くであろうが、事実だから仕方がない。…20年此の方クリスマスは際立って一般的になつたが、これはキリストの降誕日としてではなく、友情と喜びとをもって贈り物をやり取りする日、としてである。昔から日本人は、他国民が何か与ふるものを有して居れば、それを採って自分達の生活に入れてしまう。

つまり、クリスマスも彼らが西洋から採り入れたものの一つなのである。」
この文章は、そのまま現在の私達に向けられたものとして受け取られるが、実は昭和11年12月号の炬火(仙台教区報)に掲載されたブリオット師の文章に引用された朝日グラフ

海外版の一節である。40年前の日本のクリスマスも現代とあまり変わらなかつたようである。当時の日本全国の信徒数は、統計によると一〇八四一五名であつた。しかしその43年後の現在は、三九七四九一名と約4倍に近い増加を示している。

日本人のメンタリティーはそれ程変わらないうとしても、キリストは確かにこの日本に受肉され、日本というこの文化土壌の中に、みことばの種はまかれ、根つき、やがて芽ばえる時を待っている。

ヨハネ・パウロ二世が、昨年の待降節に、「キリスト教は、待降節の宗教のみならず待降(節)そのものである」と言われたことも思い出したい。

長い救いの歴史を通して、救い主がこの地上に來られたように、日本のキリスト教もまた、待降の「時」を生きているのであろうか。

ヘフナー枢機卿が来仙

去る10月31日、ドイツ・ケルン大司教区のヘフナー枢機卿が来仙された。
枢機卿は、東京教区で行われた「ケルン週間」(ケルンからの援助を感謝するため)のため来日され、その合間をぬっての来仙であつた。

広島、山口、長崎、福岡を訪問された後、仙台訪問という強行日程のため、司教館に着かれた時は、少しお疲れのご様子だったが、70歳を越えておられるとは思えない程のお元気さで、終始おだやかなほほえみを浮かべておられ、出迎えた佐藤司教をはじめ、全員その人柄に打たれた様子であつた。

司教館で遅い昼食をとられた後、スベルマン病院を訪問され、正面玄関で前田院長や職員方から盛大な拍手の歓迎を受け、病院内の要所を見学された。その後、小百合園、元寺小路教会、教区事務所という順序で訪問。席の暖まる間もなく、夕闇の中、長い間身の回りのお世話をしておられる枢機卿の御令妹マリアさんの印象深いうしろ姿を残して、仙台空港から飛び立たれた。

~~~~~

## 司教様の日程

- 12月2日 古川教会堅信
- 3日 邦人司祭団月例会
- 8日 ナザレト幼稚園新園舎落成式
- 11日~13日 司教会議

### 大船渡教会

#### ◆ 献堂 25周年を祝う

去る11月3日(土)の文化の日、大船渡カトリック教会では、献堂25周年を祝い、記念ミサと祝賀会が盛大に催された。

ミサは、10時半から佐藤司教を中心に4人の司祭によって荘厳に献げられた。その後、同じ幼稚園ホールで、昼食を中心とした祝賀会が、家族的ふんい気の内午後2時過ぎまで続いた。

祝賀会中、大船渡出身・仙台在住の山浦氏は、マルコ福音書を気仙ことばに直したものを朗読し、参会者を喜ばせた。昼食には、前日から教会の婦人会が心をこめて準備した手作りの海の幸の料理が供され、特にサンマのすりみ汁は好評で、またたくまに売り切れた。この日の出席者は、北海道をはじめ、岩手県各教会からの代表、そして仙台からは山浦家族9名等、約一五〇名で、献堂25周年の喜びを分かちあった。

爽り多かつた

#### 「福音化錬成会」―青森県―

去る10月27・28の両日、青森市内3教会が合同で主催し、青森県全体に呼びかけ、浪打カトリック幼稚園を借りて一泊の錬成会を開いた。

テーマは、「私たちにできることは何か」

で、去る6月に日本宣教司牧センターから出された「日本の社会の福音化を目指して」を土台に、私達の回りの福音化について語り合った。参加者は七つの教会から男女41名で、佐々木博師(日本宣教司牧センター所長)の講話を基調とし、グループ・ワークをしながら進めた。20代から50代の幅広い層の意見、経験が語られ、また、夕食の時は、一杯の酒をくみかわしながら、心の開かれた語り合いであった。

各自、先ず自分の周囲の福音化の急務と、明日への希望を胸に秘め、派遣された。

#### 『山上の説教』

に聞き入る



―岩手カトリック青年の集い―

秋晴れの10月13・14の2日間、初めての試みである岩手県下カトリック青年の集いが、24名の参集を得て国見温泉で開かれた。

まず、13日の夜は親睦会が行われ、各教会青年信者の現状や活動状況の報告等を含め、楽しく談笑のうちに終えた。14日の朝7時からミサが行われたが、これには国見温泉森山荘の方々や、そこで湯治をしているおばあさん信者の方々も交え、共に祈ることができた。

朝食後、近くの笹森山に登山。山頂でゲストの笹気直哉師から、山上の垂訓ならぬ山上のお話し(テーマ 社会・教会・自分)があり、その後グループ毎にデイスカッション、

散策等で時を過ごし、12時に下山。昼食後解散式をして2日間の日程を閉じた。

このつながりを今後共続けるため、お互いの連絡を取り続けていきたいと希望している。

#### 曾野綾子講演会

#### 「聖書と私」

―岩手カトリック・センターで―

10月6日(土)午後1時半から一時間半にわたり、岩手カトリック・センターで、作家曾野綾子氏の「聖書と私」と題する講演会を催した。聖書の例話ほど我々の生活にとつて適切な指針はない、とする確信にみちた講話は、大ホールに集まった四百名をこえる聴衆に深い感銘を与えた。なお、入場整理券は早々に売り切れ、各方面からの申し込みに応じきれないような状態であった。

翌7日(日)には、千厩教会主催で、落成間もない千厩勤労福祉センターで、午前10時から同じく「聖書と私」と題する講演会が行われた。これは、千厩カトリック教会と同付属清心幼稚園創立25周年を記念する講演会で、関係者の努力が爽り、雨天にもかかわらず、約四百名の町民達が出席し、メモを取りながら熱心に聴き入っていた。創立25周年にふさわしく盛大であった。

#### 聖書を知ること

キリストを知ること





### 55年世界広報の日

テーマ

#### 「広報の役割と家庭の使命」

第14回広報の日が、来る一九八〇年5月18日に、全世界で実施されることにきまつた。日本では、事情により復活第6主日、5月11日に実施することになる。

来年のテーマは、「広報（社会的コミュニケーション）の役割と家庭の使命」である。

家庭に関するトピックスは、去る一九六九年の広報の日にも取り上げられたが、ごく一般的なものであった。

家庭問題は、来年のシノドス（世界司教代表者会議）でも取り上げられるテーマであり、日本の社会においても、家庭、親子の問題が大きな問題になっており、明年の世界広報の日には家庭問題が特別な角度から話し合われるのは、時宜にかなったことである。

私たちも、来年の広報の日のために、今から、このテーマをアピールするための方法を考えていきたい。

御意見、アイデア等あれば、元寺小路教会首藤神父、または、教区事務所御連絡いただければ、幸いである。

#### 第六回仙台教区

##### 修女連院長研修会開く

去る11月6日から9日にかけて、三泊四日、松島町の仙松閣において、仙台教区の女子修

道院院長研修会が開かれた。

指導司祭として、イエズス会の中井允神父様をお招きし、共同体の霊的識別の入門程度のもの、具体例をもとに勉強した。参加者は14名で、夕食後も、問題と取り組んだり、翌日の研修の準備をしたり、話し合いをしたり、貴重な体験をした。

指導の中心は、共同体の霊的識別は、霊的生活そのものであり、頭だけで理解することでも討議を重ねてできるものでもないから、この研修でそのことを経験していくように、ということであった。とかく玩固になりがちな頭と心を、多少なりとも柔軟なものに向けてよう導かれた実りある四日間であった。

次いで、院長総会が開かれ、昭和55年度の役員が次のように改選された。

- 会長 Sr木村きぬ（ノートルダム会）
- 副会長 Sr諸遊素子（シャルトルの聖パウロ会）
- 会計 Sr原 勝子（出版パウロ会）
- 書記 Sr目黒富久子（ウルストラ会）

#### 聖霊に満たされて

##### 第二回聖霊カリスマ東北大会

第二回聖霊カリスマ東北大会は、11月3・

4日（一泊二日）、松島「仙松閣」で開かれた。

参加者は仙台22名、秋田8、八戸3、桐生2、米川2、郡山2、新潟1、計40名。

大会は「祈りの集い」が中心だった。小林司教、中村友太郎氏（上智大）の話、Br佐藤・末吉（フランシスコ会）のギター伴奏での

賛美の歌等、参加者一同深い祈りに導かれて心ゆくまで喜びと賛美のうちに二日間を過ごした。取り上げられたテーマは、「何故おそれるのか、私はここにいる」である。

人間の肉体的、精神的弱さ、罪、誘惑も私達におそれや不安を呼び、現代の環境や欠点も絶望感をもたらす。

しかし私達はおそれることはない。おそれず、ただ信じていこう。主は私達を招き、呼びかけ、望んでおられる。「心を開いてほしい」「ゆるしと愛を受けて欲しい」と。欠点はいやされ、罪は許される。「誘惑と戦うのは私自身である」「私の霊があなたの方の中にいる」

このカリスマ刷新は、現代の教会の中で、大きな働きをしている。教会の制度的なものと対立することなく、教会を生き生きと動かしている。

「ここに私はいる。おそれることはない。大胆に、勇気をもって、私の証人となりたい」多くのメッセージを受けて参加者は、来年の再会を約して、解散した。

尚このカリスマの祈りの集いは仙台一本杉教会で毎週木曜日夜7時から行われている。

**Good News**

★

クリスマスは、一日に2回聖体拝領のできる数少ない恵みの日です。（クリスマス夜の深夜ミサと、25日中に行われる他のミサの2回）

感謝してこの恵みを受けましょう。



### 会津若松教会

会津若松カトリック教会では、信者の子供(20名)を中心として、月二回、第一、第三日曜日9時のミサの後約1時間、スライド、ビデオ、祈り、おはなしなどを行っています。これは、日曜学校と呼ばず、「子供会」といってあります。責任指導は、主任司祭ホアン・ゴンザレス師ですが、準備、指導手伝い等のため、青年会の3名の女性が奉仕しています。また、この子供会が中心となり、毎年、全会津の信者の小学生2年〜6年までが夏期合宿を行ない、(4泊5日、田島カトリック幼稚園にて)信仰を深め、信仰を通しての共同体体験による子供会の和を深めています。

なお、一般の子供達のためには、当教会の会津文化センターで、毎土曜日、英語の授業(月謝有り)の後、道徳を30分いたします。(英会話指導、女性2名。道徳、主任司祭指導)これを「土曜学校」と称しています。

### 水沢教会

毎週、土曜日の3時から4時までの1時間、教会の図書室を使っての土曜学校も、この10月で2年目をむかえました。子供への宗教教育を何とかしたいという神父様のお気持ちを生かしたいと思っただけで始めた土曜学校でしたが、メンバーの変動はありながらも、絶えることなく続けることができました。

現在のメンバーは7人程(それに時々近所の子供達が仲間入ります)、2時半から子供達が集まって来て、ワイワイガヤガヤ。メンバーがそろうまでは、神父様のお話を聞いたり、一週間の出来事を報告し合ったり、そして3時、お祈りで始まります。主の祈り、時には苦心しながら自分のお祈りを作ったりその後は教材として「子じか」「子供の聖書」「聖人伝」そしてその他の絵本を使いながら進めています。中心は「子じか」の中のイエズス様のページ。ここでみんなで読み合いながら、自分の生活の中の似たようなことを考えあわせ、イエズス様を自分の身近なものとして考えさせることを目的に進めています。子供達の発言は、活発、時には脱線して話ごとんでもない方向に行ったりしながらも(この前の事、「みんなの知っている聖人は?」という質問に、「火星人」という答えが返ってきました)、こういうことが将来のよい思い出になればと考えています。また、勉強の後はお楽しみページのクイズをしたり、聖堂でロザリオを唱えたり、神父様の助言をいろ

いろ受けながらプログラムを組んでいるこの頃です。

悩みといえば、メンバーが1年から5年生までと幅広いので、1年生にもわかるように5年生に退屈しないようにと進め方を工夫していかなければならないこと。また、同様に集中できる時間が違うので、両方にとって中途半端になりはしないかということ、他方、助け合っているいろいろなことを覚えていくなど、それなりによいこともあるので、それを生かしていくつもりですが、みな様のご意見などありましたら参考に致したいと思っております、よろしく。(水沢カトリック教会便り 第5号 千田和子記)

### 一口メモ 守るべき祝日とは?



日本では、すべての主日(日曜日)と主の降誕(クリスマス)が守るべき祝日です。

日曜日は、大祝日です。簡単に休まないように心掛けたいものです。

主の昇天祭など従来守るべき祝日とされていたものは、次の日曜日に祝われるよう定められています。聖母被昇天と諸聖人の祝日は、当日祝われますが、守るべき祝日ではなくりました。また、次の日曜日にも祝うことができます。



『子供の教育』について思うこと

上智大学教授 安井 光雄  
仙台教区司祭

子供について、いつも心を痛めることがあります。どうして、信者の子供は、中学生や高校生になると教会に行かなくなるのでしょうか。また、よく教会に行く子は、どうして成績も下がり、受験にも失敗するのでしょうか。どうして、その失敗の時から教会に行かなくなるのでしょうか。

こうした現象は、もちろん例外もありましようが、かなり多く見られます。そして、幼児や小学校低学年に対する教育と比べて、青年達に対する指導が遅れている感じがするのです。では、どうしたらいいのでしょうか。

少なくとも、次の点、すなわち、

- (1) 思春期の心理をよくわきまえること。
  - (2) 学校で教えることと、教会の教理との相違しているのは何かをよく知り、それを正しく善処できる指導法を見つけること。
  - (3) 教会のメンバーとして生き抜くことが、どんなに生活の支えとなり、かつ勉強をよくすることの土台ともなるものであるかを、はっきりと示すこと、が必要なのではないのでしょうか。
- 一言でいえば、子供の成長に比例して指導を、よくしていくことでしょう。心理的割合と私達大人も学びやすいのですが、相違点については、まだ、よき指導法を見つけてい

ない人が多いのではないのでしょうか。たとえば、進化論と原罪の問題で、いまだに対立すると考えている人もいるようですが、最近の学説を見れば、とてもよい示唆が得られる筈ですし、一時、なぜ対立したのかは、歴史を教えてやれば、きっとよくわかるにちがいないりません。世界史に出てくる免罪符の問題にしても、誤解の生じたいわれを説明してあげたいものです。そして、

「私には、自分の宗教があるから教会なんか要らない」

「神って一体何ですか？」

「キリスト教は複雑すぎる」

「いつも罪、罪：」

「宗教は弱い人のためのもので、私には救い主は不必要」

「祈ってみたが、効きめはなかった」

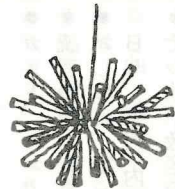
「私は、一応まともな生活をしているのに、これ以上、何が必要でしょう」等々といった質問に答える準備をしてあげねばならないのでは、と思います。

最後に、キリスト様と一緒にいればいる程、勉強しないではおれない、世に尽くす人間となるため、自分から学べるような指導と実践を与えていきたいものです。

クリスマスのために！

\* 装飾各種

① ビニールストローで



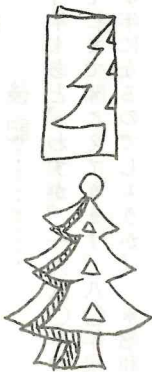
きれいな色つきビニールストローを10本、半分に折って、真ん中をリボンか毛糸などで結び、ボンボンを作り、きれいに形を整える。

② ランシャ紙、つや紙で

色ちがいの紙を3枚重ねて、ツリー、ベル、星などを作る。形を切り抜いたら3枚重ねて輪にして、リボン等を、ホッチキスでとめてさげる。ツリーは2枚重ねて切り抜き、ツリーの中心をホッチキスでとめ、四方に開き、机の上などに立て、飾ることもできる。

③ ホイルペーパー(アルミ箔)で

ホイルをそのまま星や、ベルの形に切り抜いて飾りにしてもよいが、ボール紙で形を切り抜いたものを包むと、重みがあり、飾りやすくなる。



仙台教区を考える

仙台教区には、二つの評議会があります。一つは、司牧評議会、これについては前号で説明しました。もう一つの司祭評議会について、ご紹介したいと思います。

この会は、教区長（佐藤司教）が、教区として必要な事柄について、よりよい判断と決断、そしてそれを実行することができると、教区内の全司祭が互いの意思の疎通をはかりながら、教区長を助けていくための会です。

もちろん、全司祭が集まるわけにはいきませんので、教区長、司教総代理、書記長、並びにケベック外国宣教会、ベトレヘム外国宣教会、教区司祭団、聖ドミニコ修道会、グアダルペ外国宣教会の各会を代表する司祭2名および、教区長から任命された司祭方によって、年2回（三月と十一月）集まり、運営されています。

仙台教区が、よりよい発展をするよう、どうぞお祈り下さい。

尚定例総会は、十一月十二日（月）仙台・元寺小路教会・信徒館で開かれました。

議題と話し合われた内容は次の通りです。

一、教区レベルにおける昭和55年度の司牧的年間目標を定めることについて

●年間目標を持つことは、非常に有意義なので、今年にひき続き、来年も定めることになった。詳細は、司教様が「司教教書」の中

で述べられることになっているが、評議会において、「聖書」に関する目標を定めることが了承された。

三、ゆるしの秘跡における「個別のゆるしの式」について

●現在まで、何か困難なことがなかったかどうか話し合われたが、いくつかの困難はあるにしても、司祭の司牧的配慮をもってすれば、よい点が多くあるということが確認された。

三、昭和55年の教区司祭大会について  
●来年の司祭大会のために、準備委員が選出された。

（ベランジエ師、ローネル師、斎藤師、ピシエ師、ゴンザレス師、笹気）  
四、カテドラテイクムの増額について  
●吉田師から、教区本部会計の説明があり、全員挙手をもって了承した。

五、教区レベルにおける青少年育成のための活動資金について  
●一粒会担当司祭の斎藤師より、「一粒会から、3点の条件を満たす青少年の活動に対しては、助成金を出すことができる」という報告があり、司祭評議会として、一粒会の方針に合わせるようになった。

お知らせ

\*教区事務所の冬休みは次のようにさせていただきます。  
54年12月24日～55年1月5日まで

編集

後記

\*今年もあと、わずか。一九八〇年の声がすぐそこまで聞こえてきます。八〇年代は、どんな年になるのでしょうか。 \*昭和初期の「炬火」（仙台教区報）を開きながら素晴らしい編集に感嘆しきり、そして歴史はくり返す、の感を深くしたことでした。 \*事務所だよりへの投稿も少しずつ多くなりました。巨理病院で療養中の佐々木さん毎月ありがとうございます。一日も早くお元気になりますように。

\*読者の皆様、良きクリスマスと新年をむかえられますよう祈ります。そして明年もよろしくご投稿をお待ち致しております。

投稿規定

- 投稿締切日 毎月十日
- 教会学校めぐり 原稿用紙2枚
- ひろば（子供達の作文、詩、絵など） 原稿用紙1枚
- カット、マンガ等 一コマ5平方センチ
- 読者の声（意見、希望、随想等）
- お知らせ、案内（黙想会、研修会）日時、場所、内容、連絡先明記のこと。
- その他小教区のニュース

仙台司教区事務所だより第26号

昭和五十四年十二月一日発行

発行所 仙台司教区事務所

〒30 仙台市本町一丁目2番12号 TEL 0222 22 7371